

NECTA NEWS

発行日：令和8年8月7日

■編集

一般社団法人 自然環境共生技術協会 東京都中央区日本橋人形町3-11-2
広報委員会 レコルテ85ビル 4F

■発行

一般社団法人 自然環境共生技術協会 事務局
〒103-0013
■TEL: 03-6280-3722
■FAX: 03-6280-3723
■E-mail: necta@necta.jp
■URL: https://www.necta.jp

contents...

1. <巻頭言>環境省自然環境局 荒牧調査官
2. <特別講演会報告>
3. <技術士第2次試験受験講習会報告>
4. <CoNECT2026 6/18-19開催報告（速報）>
5. <NECTA最近の動き>
6. <協会活動報告>
7. <お知らせ・イベント情報>
8. <会員からのお知らせコーナー>

一般社団法人 自然環境共生技術協会

Natural Environment Coexistence Technology Association

・ ニュースレター 第89号 ・

1. 巻頭言

地方環境局について

環境省自然環境局総務課調査官
荒牧 まりさ

平成17年（2005年）に環境省の地方支分部局として設置された「地方環境事務所」は、設置から20年が経過する中で、その業務及び規模を大きく拡大してきました。設置当時、地域の環境政策の推進、廃棄物対策、国立公園政策及び野生生物政策の4分野を担っていたところから、その後、災害廃棄物処理への支援、福島を除染・環境再生、気候変動対策、野生鳥獣対策などの業務が大幅に拡充し、定員も当初の369人から約1159人（令和7年度末時点）へと増加しています。



こうした業務や規模の拡大を踏まえて、令和8年5月15日に環境省設置法が改定され、令和8年7月1日から全国8か所に設置されている地方環境事務所（北海道、東北、福島、関東、中部、近畿、中国四国、九州）は、「地方環境局」という名称となりました。名称変更の背景としては、役割の拡大に加えて、環境省の「事務所」という名称が広域ブロック単位の出先機関としての位置づけを分かりにくくしていたことも挙げられます。財務省の「財務局」や国土交通省の「地方整備局」のように、他省庁では広域出先機関を「局」と称することが多く、これらとの整合性も踏まえ地方ブロック単位の地方支分部局にふさわしい名称としたものです。

また、今回の環境省設置法令の改正では、内部組織を従来の省令ではなく政令で定める仕組みとしたうえで、各地方環境局に局長を補佐す

る幹部として「次長」を設置するとともに、内部組織のうち「資源循環課」を「資源循環・災害廃棄物対策課」へと名称変更を行い、災害廃棄物処理における自治体支援の強化等を図っています。

業務の拡大としては、災害時における被災自治体支援機能の強化の他にも、地域の資源循環の取り組みの伴走支援、クマ対策の促進、指定管理鳥獣対策や特定外来生物防除に係る交付金執行、地域における企業の自然資本経営の推進などがあり、これらの施策に係る定員を配置しました。

これを契機として、各地方環境局は地域における環境政策実施のハブとして、これまで以上に地域に寄り添った環境政策の推進に取り組みます。具体的には、現場主義を徹底し、地域のステークホルダーと緊密なコミュニケーションを行い、地域の声・ニーズを的確に把握して信頼や連携体制の構築を図るとともに、交付金の執行や情報の発信などの自治体への伴走支援に取り組みます。さらに、環境のみならず経済、社会面も統合的に向上する「地域循環共生圏」の実現に、より一層力を入れて取り組んでまいります。

地域課題の解決や生活の向上には、地方自治体や民間企業、地域住民などあらゆる主体との連携・協働が不可欠です。クマをはじめ野生鳥獣の管理や外来種対策、自然共生サイト等の地域のネイチャーポジティブへの取組など、地域の自然環境政策の一層の取組に向けて、技術面の課題への対応は常に重要です。各地域においても自然環境共生技術協会員の皆様のご協力を得ながら取り組みを前に進めていきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

2. 令和7年度NECTA特別講演会報告

1. 開催日：令和8年5月26日（火）
2. 開催場所：航空会館
対面とリモートによるハイブリット方式
3. 演題：遺伝情報で生物多様性を保全する
4. 講師：井鷲裕司 氏（京都大学 名誉教授）

令和8年みどりの学術賞を受賞された京都大学名誉教授の井鷲 様に「遺伝情報で生物多様性を保全する。」という演題でご講演いただいた。

冒頭の挨拶で、遺伝子やゲノム解析という、その言葉だけの難しそうなニュアンスの講演会にはならない様に、実際に私たちが山などで見かける生物を取り上げ、具体的な話を織り込みながら、遺伝子を調べることで、生物保全が「これぐらいまくできる。」ということをおっしゃっていただけ、皆さんが楽しんでもらえるような講義とするという趣旨の説明があり、本題へと入りました。

生物多様性そのものに色々な意味があって、社会的にも重要だということが認識されていますが、動物園に行けばどこでも見ることができると思っているような哺乳類でも、数百とか数千ぐらいしかなくて、おそらく我々の孫の世代ぐらいになると、動物園でも見ることができないというふうに考えられます。また、植物についてもレッドリストに掲載されている日本の7,000種ぐらいの植物の大体三割ぐらいが百年後にあるかどうか分からない状況ですが、生物多様性を守ろうとする対応がされています。そして、生物を守る時に考えないといけないのは、生物というのは個体としてはいつか必ず死んでしまいますから、その個体を守るだけではなくて、ちゃんと交配させて世代交代させないといけないので、遺伝的な情報というのが非常に大事になっています。この遺伝情報を持つ DNA の設計図であるゲノムを解析する技術が、この30年で近所の公園に行く感覚で銀河の方まで行けるほどの格段の技術革新が起こり、この進歩したゲノム解析を使って生物多様性保全についての研究をしています。以下、いくつかの事例を紹介しましょう。

■中立遺伝マーカーによる個体識別・親子解析

DNA上に存在する1～数塩基から成る短い塩基配列が同じ並びで何回も繰り返されている領域、いわゆるマイクロサテライトは、指紋のように使えて、親子解析にも使えるので、シモツケコウホネの遺伝解析と法的整備を行うことで、盗掘防止にも役立った事例や、小笠原に生存している希少種のハザクラキブシについて未知の個体を見つけるきっかけにもなった。

■メタゲノム解析

メタゲノム解析という方法で、小笠原に生息しているカラスバトのフンを調べることで、カラスバトが何を食べたかを知ることができた。シマグワなどをたくさん食べていたのに全く見過ごされていたことや、アカギやガジュマルなど駆除すべきとされている外来植物もかなり食べており、外来植物と絶滅危惧種が相互関係を結んでいたことが判明し、ただ外来植物を駆除すればよいというものではないことが判った。京大の芦生演習林のシカも糞を調べることで、夏は落葉樹の落葉を食べて、冬は本来食べない（シカとしては、不味い食物となっている。）常緑樹の葉を食べることで増えていることも判った。川の水を採取して調べると、魚以外にカワネズミなどの珍しい生物のDNAが出てきたり、クマのDNAも時々出てきたりしている。また、シカのDNAは常に流れていることが確認されている。

■保全価値・難易度の評価

日本では7,000種ほどの希少種がありその中の三分の一が絶滅危惧種となっており、10年ぐらい前に大きな法改正があって、指定生物がかなり増えたが、指定すれば守れるというものでもない。メリハリをつけるために、系統的にユニークであるとか、守りやすいか、などの保全価値の研究を始めた。

国内の種であっても実は4割ぐらいは海外にも分布していることが判り、実態を系統解析したところ遺伝的独自性や保全価値を評価することができた。台湾では普通ではあるが、日本では宮古島や沖縄本島では絶滅し、奄美に稀に生息しているツルウリクサは、系統図を書くと、人がボンと持ち込んだものではなく、更には中国本土から台湾にやってきて、その一部が奄美に生息しているという順番で動いており、人が動かさずに、長い期間を経ながら別の種と分れて、じわじわ広がって来たという非常に重要な個体群であることが判り、高い保全価値があると言える。西表のランダイミズと言う植物はおそらく種が一回飛んできて、一個の種がここに定着して、世代交代もせずに根だけで増えた帰化植物である実態が判った。タイワンホトトギスは二回独立して日本にやってきたことが判った。個体数は少ないが多様性は全く違っており、非常に豊かな多様性を持っているものもいれば、全体クローンだというようなものもあり、系統的なものを評価することで、系統的にはなくなっているのは困るが、日本でなくなってもダメージはそんなに大きくはないものや、一方では系統的にユニークなものが失われてしまうなどの情報を知ることができ、評価的には非常に重要である。

そして、次はどのくらい守るのが難しいかという話だが、小笠原の保全の難しいものは有害遺伝子が普通に比べるとたくさん蓄積されており、多様な環境への適応能力範囲も狭く、これからの温暖化では非常にダメージを大きく受けることが予測される。しかしながら、レブンアツモリソウなどの保全はうまく行っており、野生で維持することは大事だが、同時に植物園などできっちり保全する必要があるものがあり、保全のための限られた資源を配分することも必要である。最近では、小笠原のムニンノボタンが一時絶滅しそうになったが、小石川植物園で増えている。また、イオウノボタンは硫黄島に生息していて凄そうではあるが、ゲノムを見ると系統的には沖縄に生息しているノボタンと変わらないことが判った。しかし母島にかなり生息しているハハジマノボタンはゲノムを見ると、ムニンノボタンよりもひどいことが判り、早急に保全すべき種であることを関係者には伝えている。

以上のように、系統解析で保全価値がわかるようになるが、系統解析図にさらに保全難易度の軸を加えることで、細かく状況を考えることができる。具体的には奄美のツルウリクサなどはゲノムも非常にしっかりしているので、簡単に手助けするだけで個体数を維持することができる。

ゲノム情報を使うことで、かなりの技術革新が起こっており、必要に応じて使うことで良い保全が可能となっている。

最後に「東広島の自然誌」を紹介しながら、この書籍の中に掲載されている農業生産のために維持されている自然（溜め池）に希少種が生息しており、驚くべき生態系が存在しているが、地元の人は価値を見出していないので、これから数年間はこのような埋もれた価値を見出す活動をやってみようと思っているとの表明がありました。

会場から植物個別のDNAと菌類をセットで調べる視点の有無についての質問があり、実際はすごく大事なことだとは思いますが、地下の環境DNAまでやるとなると、とてつもない数があって、そのあたりをどのように見極めて絞っていくかと言うところの課題があるので、そのあたりを解決するのが先決であるという趣旨の回答がありました。

(事業委員長 寺崎俊司)

3. 技術士第2次試験受験講習会報告

事業委員会では、技術士第二次試験「環境部門：自然環境保全・環境保全計画」を受験される方を対象に毎年講習会を開催しています。本講習会は今年で22回を迎え、内容の充実したテキスト、経験豊かな講師による解説、昨年度合格者による体験談等、技術士合格に向けた有益な情報提供に努めています。また、リモート講習会形式を採用しており、遠隔地の方などにも配慮しております。

1. 開催日時：2026年5月21日(木)13：00-17：30

2. 開催形式：リモート講習会

3. 講義内容：

(1) 最近の環境行政の動向と自然環境保全施策

元東京環境工科専門学校校長 笹岡達男氏

(2) 合格ラインに乗るための論文構成の作り方

元アジア航測(株) 松沢孝晋氏

(3) 受験体験談

(株)KANSO テクノス 岸上真子氏

日本工営(株) 天野雪菜氏

4. 受講者：17名

受講者は、北海道から熊本までの17名にご参加頂きました。

講師は4名で、笹岡元校長による環境行政の最新動向、松沢氏による論文作成の問題を読み解く観点やテクニック、そして、岸上氏や天野氏からの、日常のコンサル業務をこなしながら勉強する等身大の受験生としての経験談と、いずれも資料だけでは伝わらないお話しが、講師の熱意とともに伺えました。

予想問題については、昨年度問題が予想通り第六次環境基本計画で当たっていたことを踏まえ、“問題は繰り返す”ことから、過去問分析と演習が重要との示唆がありました。

体験談では、岸上氏からは昨年度受講して良かったとの評価をいただき、お二人の通勤時間の使い方や逆に気晴らしの仕方など、空き時間の使い方も身近な話題としてとても参考になったと思います。

(事業副委員長 黒石和宏)

4. 自然環境共生技術研究会CoNECT2026 開催報告（速報）

第9回となる「自然環境共生技術研究会（CoNECT）」がオンライン併用で開催され、多くの参加者を得て、有意義な発表・意見交換等が行われました。

1. 開催日：令和8年6月18日（木）13:10-17:30
19日（金）10:45-15:50
2. 主催：環境省自然環境局
一社）自然環境共生技術協会
3. 開催場所：TKP新橋カンファレンスセンター
※対面とリモートによるハイブリット方式
4. 参加者：申し込み総数232名
環境省157名、NECTA会員68名、NORNAC団体所属7名
5. プログラム
＜1日目＞（カッコ内：発表件数）
 - ・開催挨拶：堀上勝 環境省自然環境局長
 - ・特定セッション1：施設整備・維持管理運営（4件）
 - ・特定セッション2：自然とのふれあい作法（3件）
 - ・特別講演：愛甲哲也教授（北海道大学大学院農学研究院 生物資源生産学部門）
「自然とのふれあいの促進と課題」
 - ・ディスカッション：モデレーター 愛甲哲也教授＜2日目＞
 - ・一般セッション1：自然とのふれあい（3件）
 - ・一般セッション2：調査・保全手法（3件）
 - ・一般セッション3：地域の自然の評価（4件）
 - ・表彰/講評：
西村学自然環境計画課長、森本幸裕NECTA会長
 - ・閉会挨拶：森本幸裕NECTA会長
6. セッション発表内容
＜特定セッション1：施設整備・維持管理運営＞
 1. 「木製施設の長寿命化と点検手法について」
千脇 義一（㈱ザイエンス）
 2. 「十和田八幡平国立公園八幡平ビジターセンターの展示改修における障害当事者参画」
犬島 朋子（自然環境整備課整備技術管理室）
 3. 「伊勢志摩国立公園満喫プロジェクトの取組と「これから」」
野村 将司（伊勢志摩国立公園管理事務所）
 4. 「中部山岳国立公園立山室堂地区における火山ガス安全利用対策の現状と課題」
岡田 実憲（アジア航測㈱）＜特定セッション2：自然とのふれあい作法＞
 1. 【NECTA会長賞】「西表島における適正利用のための立入制限等ルール策定について」
西村 大志（㈱プレック研究所）
 2. 【環境省自然環境局特別賞】「環境問題への関心が身の回りの自然を再認識する～「市民調査員と連携する生物季節モニタリング」の副産物～」
松島 野枝（国立環境研究所気候変動適応センター）

3. 「海ワシ類の保全を目指した餌付け対策」
君島 裕介（釧路自然環境事務所野生生物課）
- ＜一般セッション1：自然とのふれあい＞
1. 「磐梯吾妻・猪苗代地域におけるインタープリテーション全体計画「山の福（めぐみ）ずかん」の策定」
荒尾 章子・増沢 直・今野 尚美・大西 優士・井上 和美（㈱地域環境計画）
平松 新一（自然環境局生物多様性センター）
 2. 「阿寒摩周国立公園満喫プロジェクト・マリモ保護活用のあり方検討について」
神津 州佑（㈱いであ）
 3. 【環境省自然環境局長賞】「ベクタ/ラスターイルで現存植生図2024を楽しむ」
山下 慎吾（環境省生物多様性センター）
- ＜一般セッション2：調査・保全手法＞
1. 「生物多様性評価に向けた深層学習による鳥類の音声抽出」
安田 泰輔（山梨県富士山科学研究所）
 2. 「統計モデルを用いた要因制御による環境保全対策の検討：ミズゴケ湿原の事例」
佐藤奏衣（㈱ドーコン）
 3. 【NECTA奨励賞】「珪藻土採掘地における8年後の自然の形成状況から自然再生のあり方を考える」
飯田 一令（㈱地域環境計画）
- ＜一般セッション3：地域の自然の評価＞
1. 「「都市の生物多様性」の指標化による評価の試み～横浜市を対象に～」
小谷 光（パシフィックコンサルタンツ㈱）
 2. 「能登半島における豊かな自然環境23地域の選定と情報発信の在り方」
松原 遥香（アジア航測㈱）
 3. 【環境省自然環境局奨励賞】「希少種保全の費用対効果に関する検討～奄美大島の外来種対策と希少種保護増殖事業の事例から～」
山本 以智人（奄美群島国立公園管理事務所）
 4. 「日本最大のサンゴ礁海域「石西礁湖」における自然再生の取組と今後の展開」
鈴木 規慈（石垣自然保護官事務所）



5. NECTA最近の動き

○通常理事会等の開催

別途ご案内のとおり、5月26日に令和7年度第2回理事会及び審議委員会が開催され、令和8年度の事業計画、予算の承認の決議をいただきました。また、理事会後には、特別講演会及び懇談会を開催いたしました。特別講演会は、京都大学名誉教授 井鷲裕司先生に「遺伝情報で生物多様性を保全する」と題してご講演をいただき、オンラインを含めて多くの参加がありました。先生には、懇親会にもご参加いただき、自然環境共生技術における遺伝情報の活用について、多くのヒントを頂きました。厚く御礼申し上げます。

○CoNECT2026

本ニュースには速報が載っていますが、6月18～19日には第9回自然環境共生技術研究会（CoNECT2026）が開催されました。次号で詳細な報告が載る予定です。特定テーマは「自然とのふれあい技術」で、一般発表にも自然とのふれあいに関する発表内容が多くありました。例年より発表応募数や視聴者数が減ったのは残念でしたが、今回から広く一般に公開する目的でYouTube配信を行い、一定の視聴者を獲得しました。これは今後も続ける予定です。来年は第10回の節目を迎えるため、充実した内容となるよう検討を進めたいと思います。

○総会

9月16日（水）に総会が開催されます。必要な準備を進めたいと思います。

（企画運営委員長 上杉哲郎）

6. 協会活動報告（令和8年4～7月）

＜企画運営委員会＞

- ・ 令和7年度第10回4月13日/自然共生サイト支援パートナー企業掲載希望受付の案内、令和7年度第2回理事会、審議委員会議案、第9回CoNECT2026、その他（野外セミナーのNECTAからのマイクロバス代金の補助）について
- ・ 令和7年度第11回5月7日/自然共生サイト支援パートナー企業掲載希望受付の案内、令和7年度第2回理事会、審議委員会、第9回CoNECT2026について
- ・ 令和7年度第12回6月9日/令和7年度第1回審議委員会会議記録、第9回CoNECT2026、令和8年度第1回通常理事会及び通常総会、技術セミナーのテーマ、その他（「造園CPDの活用」の課題）について
- ・ 令和8年度第1回7月14日/第9回CoNECT2026、令和8年度第1回通常理事会及び通常総会について

＜事業委員会＞

- ・ 特別講演会、野外セミナー、技術士第二次試験受験講習会などの事業を計画・実施

＜広報委員会＞

- ・ NECTA ニュース HTML 化の検討
- ・ NECTA ニュース 89 号（本紙）を作成

＜研究委員会＞

- ・ 5月11日令和7年度第6回研究委員会/自然共生サイト支援、令和7年度第2回理事会・第1回審議委員会、CoNECT2026について
- ・ 6月30日令和7年度第7回研究委員会/技術セミナー、今後の協会HPや広報・配信等について
- ・ 7月22日令和8年度第1回研究委員会/令和8年度第1回理事会、技術セミナー、ネイチャーテックについて

【研究会活動】

- ・ 生物多様性研究会：6月23日「生物多様性」についてのクイズ作成（バポ4枚形式）及びのシリーズ化の検討
- ・ 自然とのふれあい技術研究会：5月26日話題提供/KODOBOKU 技術による持続可能な山道保全への取組み（株式会社シーテック）、登山施設の課題と整備事例（株式会社ラスコジャパン）、検討事項/次年度の自然とのふれあい技術研究会のテーマについて、7月27日話題提供/環境配慮コンクリ等（アサヒ飲料社）、芝育成肥料（アサヒバイオサイクル社）

7. お知らせ・イベント情報

■環境省人事異動情報

NECTAに関係すると思われる環境省各部署の人事異動情報（前号以降）を、公表された情報から、幹部級に限定して整理しました。

＜7月1日付＞

- ・ 京都御苑管理事務所長←高橋啓介

＜8月1日付＞

【本省課室長・地方環境事務所長級以上】

- ・ 自然環境局自然環境計画課長←長田啓
- ・ 自然環境局国立公園課長←山本麻衣
- ・ 自然環境局野生生物課長←鈴木渉
- ・ 大臣官房環境影響評価課長←岡野隆宏
- ・ 自然環境局自然環境計画課生物多様性戦略推進室長←羽井佐幸宏
- ・ 北海道環境局長←川越久史
- ・ 中国四国環境局長←木野修宏
- ・ 釧路自然環境事務所長←中山直樹
- ・ 新宿御苑管理事務所長（併：自然環境局総務課国民公園室長）←河野道治

【統括・国立公園管理事務所長級以上】

- ・ 自然環境局自然環境計画課生態系分析官←尼子直輝
- ・ 北海道環境局統括自然保護企画官←松永暁道

- ・ 関東環境局統括自然保護企画官←笹渕紘平
- ・ 阿蘇くじゅう国立公園管理事務所長←柘植規江
- ・ 伊勢志摩国立公園管理事務所長←中村仁
＜8月7日付＞
- ・ 自然環境局長 ←則久雅司
- ・ 大臣官房審議官（自然環境局等担当）←高城亮

■理事会・審議委員会報告

5月26日（火）に令和7年度第2回通常理事会及び第1回審議委員会が開催され、令和8年度の事業計画、収支予算の承認の決議をいただきました。NECTAホームページ「情報公開資料」欄に掲載していますのでご参照下さい。なお令和7年度の事業報告、決算報告は9月に開かれる通常総会にて確定する予定です。

審議委員会は通常理事会と同時開催の形で行われ、「NECTA運営の課題」などを記載した事業計画案の承認後、以下のような助言とご議論をいただきました。

[令和8年度収支案について]

- ・ インフレ傾向・諸物価値上がりの状況下、収支に強弱をつけないと全体として事業活動の縮小につながりかねない。収入面では、会費値上げの検討や、環境省からの事業収入の増額交渉なども行ってよいではないか。

[NECTAの存在を知らしめる取組について]

- ・ 会員を増やすことは、この種組織の共通課題。
- ・ 昨年も議論し、これまでも取り組まれてきていることだが、情報発信が特に重要になっている。

[社会的ニーズに対応した情報発信のテーマについて]

- ・ 昨今「自然共生サイト」への民間企業等の関心が高まっている。相談に乗りサポートしている会員企業も多いと思われるので、実績の紹介をより積極的に行ってはどうか。
- ・ クマ対策が緊急課題となり国民の関心の的になっている。対応策について何らかの提案が発信できると、すばらしいと思う。
- ・ グリーンエキスポ2027（国際園芸博覧会）には政府出展エリアがあり、PRコーナーやシンポジウムなども可能なはずなので、参加を検討してみてはどうか。



8. 会員からのお知らせコーナー

■新規会員の紹介

＜鎌田 あきこ氏（株）ユニットタネ＞

皆さま、はじめまして。東京都多摩市在住の鎌田あきこと申します。パートナーとふたりでユニットタネというランドスケープデザイン事務所を営んでいます。1999年に創業し、27年が経ちました。



創業当初から、必要に応じて専門性の高い方々と協働しながらより良い成果につなげたいと考え、自分たちが責任をもって取り組める規模の事務所を続けてきました。

設計では、土地のもつポテンシャルや文脈を、その後の利用へできる限り引き継ぎたいと考えています。そのため、地質や植生、文化などの情報を集めるだけでなく、実際に周辺を歩き、「そこにあるもの」を見つけながら、敷地ごとの解を探ることを毎回大切にしています。

これまでは建築スタディから始まるプロジェクトが多かったのですが、最近は計画の立ち上がりからランドスケープに関わる機会が増え、ますます面白さを感じています。また、設計だけでなく管理や活用に関わることも増え、外部環境の「質」への関心が高まっていることを実感しています。

NECTAに入会し、早速視野が広がるような機会に恵まれています。ランドスケープの仕事はさまざまな分野と広く深くつながっていることを、あらためて実感する日々です。これから多くのことを学ばせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

＜中村 千春氏（計測ネットサービス(株)）＞

昨年より参加させていただいております、中村千春です。

私は以前、環境調査会社で調査員として、さまざまな野生生物調査に携わっていました。特別保護地区のような恵まれた自然環境だ



土木・建設業界に向けた測量システムの開発会社で働いています

けでなく、人が簡単には立ち入れない里山周辺での現場も多く経験し、生態系保全や野生生物保護の現場に直接関わってきました。

そうした調査を通じて、自然環境を守るためには、生物そのものの保護だけでなく、獣害防止柵や砂防ダムといった地域の暮らしや自然環境を支える基盤整備も重要であることを実感しました。利用者の目に触れにくい場所ほど維持管理や点検の負担が大きく、その役割の大切さも強く感じました。

その後、国立公園協会および自然公園財団にて、国立公園誌の編集担当として、日本全国の国立公園の状況や保全・維持管理に関する取り組みを冊子としてまとめる業務に携わりました。現在は測量・計測システムを扱う会社に所属し、主にカタログや製品紹介資料の制作業務を担当しております。

野生生物の保護や自然公園の維持管理に関わるさまざまな技術や取り組みを取材・整理する中で、環境分野だけに限らず、観光やインフラ整備と連携した多様な取り組みを学んできました。

現在は建設業・土木業向けの3次元計測システムを扱っていますが、少子高齢化や担い手不足、限られた予算や人材の中で維持管理を続けていく課題は、環境分野とも共通していると感じています。だからこそ、効率化や自動化を通じて未来へつないでいく視点は、分野を超えて重要だと考えています。

日々の仕事では、現場課題をどう伝え、どう整理して価値として届けるかを意識しています。まだ学ぶことも多いですが、皆さまとの交流を通じて知見を深め、より実務に根ざした取り組みにつなげていければと思っています。

どうぞよろしくお願いいたします。

■ 国立公園誌バックナンバーを順次公開します！

自然公園財団の機関誌『国立公園』は、1929（昭和4）年3月に国立公園協会から発行されました。戦時中休刊していた時期があるものの、2029（令和11）年3月には創刊100周年を迎える歴史ある専門誌です。残念ながら2012年に国立公園協会が解散し、それ以降は当財団が発行業務を受け継ぎ今日に至っています。

創刊以来国立公園に関する様々な話題をとりあげ、多方面にわたる関係者からの寄稿が掲載されてきました。国立公園行政の所管が環境庁自然保護局から環境省自然環境局へと移行した2001年以降は、生物多様性や野生生物関連の記事も次第に増え、とりあげる特集テーマも裾野が広がっています。

このような状況のなか、当財団では一般の

方々に国立公園をより身近に感じてもらうため、この歴史ある国立公園誌全号の表紙画像と目次データを公表することにしました。さらに創刊100周年に向け、戦後に発行された同誌バックナンバーを本年5月から5か月に1回、各回10年分を当財団ホームページ上で順次公開していきます。公開の際には、対象となる期間にまつわるエピソードなどを江戸川大学国立公園研究所に解説いただく予定です。

なお戦前に発行された『国立公園』（第1巻第1号～第16巻第3号）は、不二出版（株）から2012年に復刻版が発行されていますので、こちらも参照いただければと思います。

国立公園誌には、一世紀にならんとする国立公園や自然環境保全に関する歴史的にも貴重な資料が蓄積されています。ぜひNECTA会員の皆様にご活用いただければ幸いです。またこれを契機としてご購読の輪が広がることを願っています。

＊掲載ホームページURL：

<https://www.npfj.or.jp/np-mag-archive/>

（（一財）自然公園財団 理事長 下村彰男）

《編集後記》

巻頭言に寄稿いただいた荒牧様をはじめ、ご多忙にも関わらず、寄稿いただいた皆様に感謝申し上げます。また、熊本地震で被災された方々にはお見舞い申し上げます。

特別講演や技術士第二次試験受験講習会、CoNECT2026など、NECTAとしてイベントが盛沢山の時期でしたが、そんなことも忘れてしまいそうなほど暑い日々が続いております。酷暑、クマ問題等環境に係る者にとって対応が難しい問題が次々と襲ってきますが、体調にはくれぐれもお気遣いください。

（広報委員 大石善子）